

摩擦（まさつ）としての異文化コミュニケーション

価値観や習慣のちがいがあれば、摩擦がおきる。異文化は、いつもどこでも「心地よい」わけではない。しんどい、めんどくさい、わずらわしい、そのような否定的な感情をひきおこすこともある。そのとき、摩擦をさけるために接触をさけたり、自分の意見をいわずにだまったり、相手をだまらせたりすることがある。そのようにして、居心地のよさが担保される。安心をえる。「だれかを排除して、自分の安心をみつける」——ことばにすると印象がわるい。けれどもそれは、わたしたちが日常的にしていることではないだろうか。

「ここにいると、ほっとする」「いっしょにいると、安心する」——そのように感じるのは、そこに摩擦がないからだ。ひとりになると、ほっとする。摩擦をさけていけば、最後にはひとりになる。

ひとりになると「ほっとする」ことがあるのは、あたりまえのことである。それは否定すべきことでもない。摩擦はしんどい。それでも、だれも、ひとりだけでは生活できない。摩擦と安心の両面をいきっていくしかない。

共存するということは、ときには摩擦がおきるということだ。ぶつかりあうということだ。「みんな仲よく」というのは幻想にすぎない。価値観は対立する。習慣はちがう。けんかにもなる。けれども、それでいいのではないか。

習慣や価値観、社会制度をめぐる意見が対立するとき、どちらかだけが一方的に非難されるような状況は、公平とはいえない。しかし、ただ両者が意見をぶつけあっているような状態であるなら、問題とはいえない。むしろ、歓迎すべきことではないか。

関係を固定することなく、異論をかかえたまま、摩擦をこわがることなく、自分の権利を主張し、そして、異論や対立する権利があるなかで、いかに「おりあいをつけていく」のか。模索することしかできない。

民主主義の社会、多文化社会はさわがしいのが当然である。もし、しずかな社会があるとすれば、それは異論が抑圧され、自分をだせずにいるからだ。

コミュニティの形成—似た者同士があつまる

「日本人」が海外に移住し、ブラジルやアメリカなどに「日本人街」（リトルトーキョー）を形成した。単に「同じ日本人」としての意識だけでなく、同郷ということから「県人会（Kenjinkai）」をつくり、コミュニティを形成している。「同じことば」「同じ文化」「同じ経験」を共有しているということには求心力があり、似た者同士があつまることになる。たとえばブラジルで発行されている日本語新聞『ニッケイ新聞』のサイトでは「県人会」というタグのついた記事一覧がある（<https://www.nikkeishimbun.jp/tag/kenjinkai>）。

現代社会はグローバル化しているといわれ、じっさいに、たとえば情報のアクセスは「いつでも」「どこにいても」が実現しているといえる。世界の情報にアクセスできる。しかし、じっさいはどうか。マーガレット・ヘファーナンはつぎのように指摘している。

なによりもオンラインでは、住んでいる場所に関係なく、世界中の人に会える。しかし我々はいま、歴史上でもっとも多く情報にアクセスできるというのは事実だが、ほとんどの人はそれを利用していない。我々は新聞と同じように、ブログを読む際にも自分が同意できるものを読む。しかも事実上無限に反響室がある。ブログの85パーセントは同じ政治的傾向を持った他のブログにリンクしている（ヘファーナン2011:33）。

ウェブ上では、さまざまな固まり（コミュニティ）を見いだすことができる。そこには、似た者同士の同化作用と、他者への異化作用がはたらいている。親近感でつくられたコミュニティが、ときとして他者への攻撃的な態度をうみだすことがある。安心できるコミュニティの外は「危険」だと認識してしまうのである。

人間の行動には、そのような傾向があるということ認識したうえで、他者への態度をふりかえり、敵意や偏見のまなざしをむけるのではなく、想像力をはたらかせることが必要であるといえるだろう。人は、閉じこもった空間のなかだけでは生きてはいけない。すべての人が「脅威は外にある」という認識をもちつづけていれば戦争がなくなることはない。それでは、どのように関係をむすびなおすことができるのだろうか。

「文化がちがうから」？—文化還元主義の問題

いわゆる「国民」（文化的／民族的多数派）は、「外国人」や「異民族」との間で摩擦や衝突が生じたとき、「文化がちがうから」「宗教がちがうから」などといって納得してしまうことがある。そのとき、「文化のちがい」というものを「決定的なもの」のようにとらえてしまっている。そして、接触自体をさげようとしたり、相手を一方的に非難したりすることがある。それだけにとどまらず、外国人嫌悪や排外主義を正当化し、強化してしまう場合もある。

多文化社会における摩擦や衝突を「文化のちがい」のせいにするのは「文化還元主義」である。摩擦や衝突の背景にある社会、政治、経済的な要素を無視している。

もちろん、文化のちがいによる誤解や衝突もあるだろう。しかし、それだけではないはずだ。複雑な現実を単純化してしまえば、わかりやすいかもしれない。けれどもそれは現実をみているのではなく、自分の固定観念を相手に投影しているだけである。色メガネでみているだけである。

社会問題について議論するとき、問題のありかをマイノリティや社会的弱者のせいにするのを、「スケープゴート化」という。根本的な問題から目をそらして、だれかを悪者にしたてあげることである。文化還元主義とスケープゴート化をつづけるかぎり、社会の多数派は自分の特権的地位を維持することができる。自分たちの責任を棚上げすることができる。しかし、それでいいのだろうか。

世界観を更新する

社会問題や差別について議論するとき、きまり文句のように「偏見をもつのはよくない」という。先入観をもっていたことに気づいて「反省した」という。しかし、人それぞれに世界観があり、知識がある。そして、知らないことがある。だれもが、なんらかの偏見や先入観をもっている。表現をかえれば、それは「世界観」や「経験則」である。

重要なのは、さまざまな他者と交流していくなかで、自分の世界観や知識、あるいは価値観を更新しつづけることができるかどうかである。

「日本人」って、だれのこと？

「日本人」について言及するとき、それがどのような意味の「日本人」なのか、あまり意識することがない。その「日本人」とは、国籍をさすのか。民族性をさすのか。文化か。言語か。血液か。居住地か。たいていの場合、そのどれでもない。すべてをうやむやにした「日本人」がイメージされている。なかには、日本人というカテゴリーに「ふつう」という、さらにあいまいな表現をくわえることがある。

「ふつうの日本人」

「日本人」があいまいな概念であるように「日本文化」というのも、あいまいな概念である。それは「国民の文化」なのか、「民族の文化」なのか。アイヌ文化や沖縄の文化をふくめるのか、ふくめないのか。日本文化としてイメージされているもののなかには、大陸（中国やインド）を起源とするものがある。そのような「外来の文化」は日本文化なのか。「外来の文化」というものをそぎおとしていけば、「純粹の固有の文化」というものが発見できるのか。

文化はすべて、交流の産物である。人はたえず移動してきたし、これからも移動しつづける。外来と土着という概念は不毛な対立にすぎない。純粹という概念は「異物」を認識したときに、事後的に認識されるものにすぎない。異物なしには純粹という概念が成立しないということだ。

そもそも、国境線を文化の境界線としてとらえることに問題はないのか。西川長夫（にしかわ・ながお）の議論をみよう。

フランス文化や日本文化の存在に疑問をいだくということは、文化の問題を「民族」や「国民」のレベルで切り取ることに疑問をいだくことである。より一般的な形で「国民文化」への疑問と言いかえてよいであろう。多民族国家の例を引くまでもなく、「国民」は一般に雑多な文化を担う集団の集まりであるから、「国民」がある単一な文化の基礎的な集団でありえないことは誰の目にも明らかだろう。ある人間が××人と呼ばれるのは、その国の国籍を有することが唯一の条件であって、その人物の文化的な内容は問われない。またベネディクト・アンダーソンがいみじくも定義したように「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治的共同体」であって、心に描きだされたような「国民」が現実存在するわけではない。

では「民族」であれば文化の基礎的な集団となりうるであろうか。一般に民族は文化の母胎であると考えられている。だが「民族」は「国民」以上に曖昧な概念である。「国民」にはその容器ともいべき国家があり、領域を区切る国境があるが、「民族」の境界を定めるものは想像力以外に何もない（にしかわ2001:286）。

「外国人」に「日本文化」を紹介するというとき、日常生活には登場しないものを持ちだすのは、なぜだろうか。キモノ、茶道、歌舞伎などを持ちだすのは、どうしてなのか。

異文化に接するのはたのしい。「めずらしい」からだ。ちがうものは新鮮だからだ。しかし、その「ちがい」をプレゼンテーションしようとして自分たちの日常から「とおい」ものを持ちだすのは、文化を「博物館に陳列されるもの」のようにとらえる態度である。

人間は、それぞれちがう。そして同時に、それほどちがってはいない。共通点はいくらでも発見できる。それだけのことだ。ありのままの日常生活に文化があり、ちがいがある。人間は文化や伝統の継承者であるだけでなく、文化をつくる主体である。「いきる」ということが、人間の生活が、さまざまな文化をかたちづけている。

文化を比較しようとするとき、便宜的に集団をおおざっぱに色わけし、分類し、文化をそれぞれ記述する。それは便宜的な記述にすぎないし、その人の視点、その人の世界観にすぎない。しかし、その分類や記述を固定化したり、絶対視したり、その「色わけ」を「敵と味方」の境界線にしてしまうことがある。

なんのために文化をかたるのか。文化を比較する目的はなんなのか。おおざっぱな議論は、異論を抑圧してしまう。

「日本人はふつう、このようにする。」

このような想定が、多様な価値観を抑圧してしまう。文化論は、きめつける行為でもある。福岡安則（ふくおか・やすのり）は、『在日韓国・朝鮮人』でつぎのように「単一民族」という幻想を批判している。

…日本は同質的社会だという言説には、日本は同質的社会であるべきだという価値観がセットになっている。事実認識のよそおいをもって価値判断が語られるとき、無意識裡（むいしきり）の不寛容がはたらきやすい。そこに問題がある（ふくおか1993:15）。

「日本人はふつう、このようにする」という主張には、「日本人は、このようにふるまうべきだ」という価値判断がこめられている。

ナショナリズムとはなにか

第1回の配布資料で、食文化について注目しながら、文化とは「こだわり」とであると指摘した。人間は、さまざまなことにこだわりをもっている。そのこだわりが、摩擦をうみだすこともある。『ナショナリズム入門』で植村和秀（うえむら・かずひで）は「ナショナリズムとはこだわり」とであると指摘し、つぎのように説明している。

…ナショナリズムという言葉には、争いのイメージがつきまといまいます。自分たちは正しい。われわれの敵は悪い。敵をこらしめよう、やっつけよう。そのような叫び声が群衆から響き渡る。こういった印象が呼び起こされるように思うのです。そして、そのような群衆の中に紛れ込んだ、そのことに関心のない人間は、どうにも居心地が悪くなります。それは、他の人たちとこだわりを共有できないからです。

ナショナリズムとは、ネイションへの肯定的なこだわりにはなりません。…後略…（うえむら2014:11）

それではネイションとはなにか。植村は「ネイションを表現する便利な日本語がない」と指摘し、つぎのように説明している。

…ネイションの日本語訳としては、国家、国民、民族といったものが考えられます。国家としてのネイションにこだわる考え方であれば、国家主義と翻訳するのが適切ですし、国民なら国民主義、民族なら民族主義という対応関係が成立していきます。ネイションのエッセンスへのこだわりなら、国粋主義という日本語訳も可能です。多義的なネイションのどれか一面に肯定的なこだわりを持つと、その一面に応じて訳語も変わるわけです。

ただし、ここで問題なのは、一面のみにこだわることは極めて困難である、ということです。国家主義でもあり国民主義でもある、さらには民族主義でもある。または、国民主義だけれど民族主義ではないが国家主義と言えなくもない、といった組み合わせが考えられるのです。…後略…（12-13ページ）

植村は「ネイションとは、土地を持ち、歴史的に形成され、ネイションとして広く強く認知されたものである」と定義している（141ページ）。

ナショナリズムは、国や民族を単位にして、「われわれ」意識をもつものである。そのとき、外部の人間（外国人）は他者化される。問題なのは、その「外部」とは、いまここでいっしょに生活している人たちでもあるということだ。

その国の国籍法によって、住民の国籍が左右する。つまり、その地で生まれていても、外国人として規定される場合もあれば、その地で生まれたというだけで、その国の国籍をえる人もいる。

国籍法という制度にも、ナショナリズムが反映されているといえるだろう。つまり、「かんたんには、われわれの仲間には入れない」という意識があるからこそ、日本では血統主義の国籍法がとられているのである。

逆にいえば、そういった意識が緩和されれば、出生地主義の国籍法に改正されるだろうということだ。

今日におけるナショナリズムの問題は、「領土の外にいる「かれら」と「われわれ」の関係にとどまらず、ともに生活している「わたしたち」のなかに、制度によって区分があり、差別があるということである。そしてさらに、自分たちが他者化した「だれか」を態度や発言によって差別していることがあるということである。

もうひとつ重要な点は、日本国籍の人たちのなかにも、民族的多様性があるということである。日本社会においては、言語的・民族的マイノリティは、自分たちの言語や文化を生活のなかで実践し、継承していくことが困難な状況にある。

現在、多文化共生がさまざまな場でスローガンとして語られている。しかし、そこでの共生とは、日本人と外国人の共生を模索するという内容であることがほとんどである。岡本雅享（おかもと・まさたか）が『日本の民族差別』で指摘しているように、「外国人との多文化共生」ではなく、日本国籍者の中にもいるさまざまな民族の共存という観点で捉えていかなければ、多文化共生が目指す課題すらも達成できないのではないか」ということである（おかもと2005:7）。

敵対心をうみだす集団意識

社会心理学を専門とする小坂井敏晶（こざかい・としあき）は、ナショナリズムについてつぎのように解説している。

民族対立や民族紛争に言及される際、複数の民族の間にある相容れない利害関係や、信仰上の相違、文化的内容の差異などという与件がまずあり、そのために民族の平和共存が難しいのだと理解されやすい。しかし…中略…、固定した同一性を出発点として民族を考えること自体がすでに誤っている。また、集団の対立は必ずしも現実の利害関係や文化の違いがあるために生ずるとは限らない。

社会心理学における実証研究は、二つの集団の間に利害対立がまったくない場合でも、範疇化が起きるだけで、自らが属する集団を優遇し、他の集団の構成員を差別する傾向を明らかにする。例えば、硬貨を投げて裏が出るか表が出るかによって無作為に選ばれた半数の被験者を「紅組」と名付け、残りの半数を「白組」と呼ぶだけで、各被験者は自らが属する組をひいきする（こざかい2011:36）。

つまり、「範疇化自体が差別行動を生む」ということだ（38ページ）。それなら、カテゴリー化、線ひきをしなければよいのか。しかし「我々はみな社会的な存在であり、民族・宗教・職業・性別といった範疇から完全には自由にならない」（39ページ）。

また、個人のレベルでカテゴリー化をやめることができるわけでもない。じっさいに、「国民」と「外国人」との間に「国の制度による線」がひかれているとき、その線を「なかったことにする」ことはできない。もちろん、国籍による差別をなくすことで「線をひくことの問題」を解決することはできる。しかしそれは長期的な課題であって、突然実現できることではない。国内だけの課題ではなく、世界全体の課題でもある。国境線や入国管理局、軍隊などが現にあるかぎり、「かれらと、われわれ」という意識を完全になくすことは困難だろう。

それなら、自由になれないから、しかたがないのか。そうではない。そのようなカテゴリー化のメカニズムを理解し、その問題点を把握していれば、なにか感情的な対立が生じたときに、状況を冷静に判断できるようになる。

小坂井の主張にしたがうなら、線ひきによって生じた対立によって、文化のちがいが「発見される」ということも、十分にありうる。あるいは、積極的に差異化するということもあるだろう。相手が「線のむこう側」にいると見なすからこそ、ちがいをつよく感じるということがありうるわけである。逆にいえば、「線の内側」は同質だと感じてしまうことになる。

このような問題を考えてみると、なるほど「文化」という概念は、あやうさをはらんでいるといえる。いいかえるなら、文化の問題は、きわめて政治的であるということだ。

他者を「親日」／「反日」で二分することの危険性

マスメディアにおいても、日常会話やウェブ上の書きこみにおいても、他国やその国民を「親日」であるとか「反日」と呼びならわすことが広く一般化している。とくに、「反日」と見なした相手に強い敵対心、警戒心をもっている様子が観察できる。このように他者を「敵味方」で二分するような態度は、一方的な被害者意識による先制攻撃を呼びおこす危険性がある。

「反日」という語が定着し、なじんでしまうと、「反日」というメガネを通してしか相手を見ることができなくなる。実態に即した認識ではなく、想像上の他者に対して攻撃を仕はじめる。自分の敵意を相手に投影しはじめる。それは記号化された他者でしかない。

ナショナリズムをこえて

人と人とのあいだには、「おなじところ」「ちがうところ」「にているところ」がある。そのどれに注目するかによって、同一性を強調したり、ちがいを強調したりする（同化と差異化）。

人が「文化」をかたるとき、しばしば内部の同一性を強調し、外部の異質性を強調してしまう。そのような議論は同化主義的で排外主義的な文化論である。「グローバルな共生」という視点から多文化社会を論じるのであれば、ナショナリズムをこえた文化論がもとめられる。それはつまり、境界線を絶対視しない、固定的にとらえないということだ。

そこで第一に、文化を相対的にとらえることが必要である。そして第二に、人権など、文化以外の視点を取り入れる必要がある。その両方が重要なのだ。どちらか一方だけでは不十分である。

文化を相対的にとらえるということは、「別の世界は可能だ」という認識にたつということである。人権の視点を取り入れるのは、「よりよい世界を想像する」ということだ。

文化という概念は、意義ぶかいところもあり、危険なところもある。「文化」という視点がコミュニケーションをひろくものになるのか、とじるものになるのか。それは、わたしたち次第である。文化という概念は手段であって、目的ではない。「多文化社会」という認識にたつて、どのような世界を展望するのか。そのさきに、どのような将来像をむすことができるのか。それはつまり、「わたしはどのような社会で生活したいか」ということだ。

参考文献

- 植村和秀（うえむら・かずひで）2014 『ナショナリズム入門』講談社現代新書
岡本雅享（おかもと・まさたか）編 2005 『日本の民族差別一人種差別撤廃条約からみた課題』明石書店
亀井伸孝（かめい・のぶたか）2015 「文化が違うから分ければよい」のか—アパルトヘイトと差異の承認の政治」
<http://kamei.aacore.jp/synodos20150225-j.html>
小坂井敏晶（こざかい・としあき）2011 『増補 民族という虚構』ちくま学芸文庫
杉本良夫（すぎもと・よしお）／ロマス・モア 1995 『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫
スチュアート、ヘンリ 2002 『民族幻想論—あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社
西川長夫（にしかわ・ながお）2001 『増補 国境の越え方—国民国家論序説』平凡社ライブラリー
日本移民学会編 2018 『日本人と海外移住』明石書店
福岡安則（ふくおか・やすのり）1993 『在日韓国・朝鮮人』中公新書
ヘファーナン、マーガレット 仁木めぐみ訳 2011 『見て見ぬふりをする社会』河出書房新社
馬淵仁（まぶち・ひとし）2002 『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会

ポイント解説：社会心理学のすすめ

文化のちがいは、たしかにある。人間の行動は文化の影響をうけている。その一方で、傾向として、ある状況におかれたときに人がとる行動というものは、文化のちがいをとわず、それほどちがうわけでもないということが心理学の研究によってあきらかにされている。ヘファーナン『見て見ぬふりをする社会』は社会心理学の入門書としても活用できる。

課題（テストの練習1）：コメントとあわせて、かならず提出すること（記入欄はユニパ参照）

海外で活動している「県人会」（日本人移民の会）について、具体的に一つとりあげ、団体名、設立年、活動内容をごく短く紹介する。参照した資料もあわせて提示すること。どの都道府県の県人会でもよい。ほかの学生とかぶらないように目指すこと。

■■○○県人会：▲▲などの活動をしている。

出典：▼▼▼（ウェブなら題とURLなど。本や論文なら、著者名、発表年、本や論文の題、出版社や雑誌名と巻号）

コメントの紹介

今回の講義の内容を見た時に、大学1年生の時に受けた専門科目の内容を思い出した。その講義ではサイドが唱えたオリエンタリズムについての講義であった。オリエンタリズムとはWikipediaによると「オリエント世界へのあこがれに根ざす西欧近代における文学・芸術上の風潮」「世界を西洋と東洋に分けて考える考え方」と書いてある。しかし、この時の講義において、先生はオリエンタリズムの特徴として外在性というのを挙げていた。これはその先生によれば真実がどうであれ優位な者の関心などが不利な側の同意なく事実になってしまうということであった。今回関係の非対称性の中で多数派には名前がないという内容があったが、この先生が言っていた考えをもってすれば、多数派の側（社会的にふつとされている存在）が優位な者が特殊とされている少数派のことを恣意的にカテゴライズしているということなのかと思った。…

…世界を分類した時、インドはアジア側に分類されるのか、ヨーロッパ側に分類されるのか、ということだ。もちろん、州で分けるとアジアに分類されるのだが、歴史的背景（イギリスに植民地支配されていたこと）を鑑みると、生活様式や民族はもしかしたらヨーロッパ寄りなのかもしれない。…

【あべのコメント：言語学的には「インド・ヨーロッパ語族」ということで、言語がルーツが同じだったりもする。インドにもヨーロッパにも、インド・ヨーロッパ語族に属さない言語もありますが。インドの文化は仏教を媒介として日本にも伝来しましたし、文化の流動性、越境性というのは興味ぶかいですね。かんたんに線引きできない。】

男女の関係の非対称性に関してほかに例がないか考えてみた。わたしはスペイン語を専攻しているため、スペイン語の中で思い浮かぶものがあった。スペイン語では男女混合の複数の人間をさすとき「ellos」という言葉を使う。この言葉は男性のみの複数の人間を表すときにも使える。女性のみ複数の人間を表すときは「ellas」という別の単語が使われるのだ。「ellos」には「彼・彼女ら」と「彼ら」という二つの意味を含むことになる。それは男性がいる場で女性がその集団にいることは重要視されていないと捉えられるのではないだろうか。男性中心という考え方が言語にも根付いているのだろう。

…私が言われたことのある「女の子らしくていいね」という言葉について考えてみました。差別とは「見下す行為」とあるけれど、この場合向こうには見下す意図はなく、むしろ私を喜ばせようとしているのだと思います。でも、よく考えてみても、「女の子らしさ」って、わかりません。これを言われたときは、お母さんのお手伝いをしていたり、ピンクのものを身につけていたり、髪の毛を二つ結びにしていた時などです。でも、これは男性でもすることです。その人の中では、女の子はお手伝いをし、ピンクのものを着て、髪の毛を長くするもの、と決まっているのでしょうか。男性が私と同じことをしていたら、これを言った人はどう言うのだろうか、と思いました。小さいころ、この言葉を言われたらすごくうれしかったのを覚えています。でも、いまは、よく言い表せないけれど、きゅうくつな気持ちになります。

【あべのコメント：「きゅうくつな気持ちにな」というのがポイントですね。「女の子らしい」というワクにおしこもうとしていると感じられるからでしょう。人間は自由であるのに、社会は人の自由をうばい、型に「はめこむ」ように役割期待している。ほめたらしいというものではないということですね。なお、職場で「きょうもキレイだね」と発言することは、相手がたとえよるこんでいても、職場環境を悪化させる行為（環境型セクハラ）とみなされます。】

…10人いたらそれぞれ性格が異なるように性別や性的嗜好も異なるのが当たり前なのだから、カテゴライズされたところかの集団に属する必要はないし、自分で自分の性別に名前を付けたっていいと思う。そしてカテゴライズされたところかの集団に属することを強要するような社会ではなくなればいいなと思う。

差別ってなんだろうということについて、佐藤裕氏の定義に基づいて思ったことがあります。男らしさ、女らしさというものです。これについて僕は疑問を持ちます。僕は顔立ちが中性的で、声も比較的高いほうなので、初対面の人に「かわいいですね」とか「かわいい声してますね」としばしば言われます。かわいいと言われるよりかっこいいと言われるほうがやはりうれしいですが、かわいいという言葉もほめ言葉だと思いますし、以前は複雑な気持ちでしたが、最近はいい意味で捉えています。しかし、たまに、僕の好みについて聞いて「男っぽくないね」とか「もっと男らしくしたら？」という人がいます。それは違うのではないかと。基準を持ち込んで同化しようとする差別ではないかと。ある人が考える男らしさからはみ出していたとしてもなにも悪いことはないと思います。振る舞い方は自分で決めるものだし、仮に男らしく生きて疲れてしまえば意味がないと思うのです。

中学生のころ、友達がみんな一人称で“おれ”を使うので、僕も“おれ”と尝试してみたら、「〇〇が“おれ”って言うのは違和感ある。顔が似合わない。」と言われたことがあります。すごく嫌な気持ちになりました。一人称は自分を指す言葉なのだから、他人から似合う似合わないと言われるものではないと思います。そんなことがあって今でもおしゃべりなどの場面では極力一人称を省きますし、“自分は”と話すことが増えました。英語のように統一した一人称であればどれほど楽なのだろうと思ったりもします。差別的な言葉をぶつける人々は“世間的に見て君はこうしたほうがいい”という基準をもって発言するのだと思います。でもそれはおせっかいであるし、人によって価値観は違います。自分の考えを相対化することは、差別を是正するうえでとても重要なことだと思います。

【あべのコメント：とても論理的に説明できていて、すばらしいです。】

今回の講義で…思い出したのが、アセクシュアル(無性愛者)についての記事でした(「恋愛しなくちゃいけないの？ アセクシュアルの私が感じる生きづらさ」HUFFPOST、2017年10月26日)。その記事の中のとあるアセクシュアルの方のインタビューで、その方は東京のLGBTのイベントで、あるレズビアンの人に「恋愛しないって可哀想だよ」と言われ、ショックを受けたといいます。性的マイノリティの中にもさらにマイノリティがあり、恋愛するかしないかという基準でまたカテゴリーが区別がされてしまっている、という事実を知りました。有性愛者という言葉もあまり耳にしませんし、恋愛していなかったり恋人がいない人は良くない、という風潮が未だ残っているように感じます。おそらく、恋愛は今の世の中の多くの人が経験していて、ドラマや映画でも盛んにテーマになっていることなので、「普通」と捉えられるのだと思いますが、有性/無性愛者の区別は異性/同性愛者と構造が同じだと感じました。自分が当たり前だと思っていることは絶対に当たり前で正しいと思いきや、世の中には色んな人がいるんだな、ということだけをただ受け入れるようにしたいと思います。…

【あべのコメント：記事にリンクしておきます。https://www.huffingtonpost.jp/tsutsu/asexual_a_23225605/】

私は自分の恋愛対象が分かりません。これまで異性に恋愛感情を抱いたことはありません(自覚している限りでは)し、かといって同性に恋愛感情を抱くのかと言われるとそういう訳でもないような気がします。中学生の頃、クラスの人に「異性にあまり興味が無いみたいだけど、ひょっとして同性が好きなの？」と聞かれたことがあります。その時も上手く答えられませんでした。確か分からないとだけ言ったような覚えがあります。…そもそも人間とは須く誰かに恋愛感情を抱くことが前提の生き物なののでしょうか。異性愛者ではないなら同性愛者なのかも、そう思う気持ちは私もよく分かります。実際私も自分で自分の恋愛対象を探ったときにそのような思考回路になりましたし、それでもやはりどんな性別だろうが恋愛感情を抱ける気がしないと思った時には人間として致命的な欠陥があるのかもしれないと思うなどしました。しかし、いつぞやかにインターネットで調べてみたとき、アセクシュアルやノンセクシュアルなど、恋愛感情を抱かない人も一定数いることが分かりました。それらが自称か他称かまでは特定できませんでしたが、特殊だから、もしくは少数派だから特別に名前がついているにしろ、少なくともそうして括れるくらいには同じような人がいるのだと安堵したのは確かです。普通じゃないから名前が付けられる、それを屈辱的に感じる人もいるのかもしれませんが、名前があったことで知れたこと、救われたということもあるのだなと思うと何だか複雑な心境です。

これは余談ですが、私が自分のセクシュアリティについて探っている際に見つけたサイトの内の一つ、“anone(<https://anone.me/>)”がものすごく面白かったです。質問に答えていくと自分に近いところの性や恋愛指向などのパターンを教えてください。もちろん自分で思っているのとは違う結果が出ることだってあるでしょうし、ここで出た結果が絶対的に正しいという訳でもないのですが、それでもヒントにはなると思います。それに、様々なセクシュアリティの存在を知れて知見が広がりました。過去の自分のデータと比較することもできますし、自分の変化を知れて面白いです。

【あべのコメント：複雑な心境になる必要はまったくありません。】

カテゴリー化して名前をつける、というのはごく一般的に起こっています。例えば、Twitterをやっている人はツイッター、Instagramをしている人はインスタグラマー。Twitter上でインスタグラマーは陽キャでツイッターは陰キャという属性付けのようなものもよく見かけます。陽キャ、陰キャという言葉も今ではよく使われていますが、元々はなかった言葉です。更に、陽キャ、陰キャのどちらでもない人のことは陰陽師と呼ぶなどと名前付けがされていく過程をTwitterにてリアルタイムで見ました。このような名前付けはなぜ行われてきたのでしょうか。私は、この「陰キャ、陽キャ、陰陽師」の三つから考えました。まず、三つの言葉の中で最初に広まったのは「陰キャ」という言葉だと思います。学生時代にクラスに馴染めず一人で本を読んでいるような日陰にいる存在として、今陰キャとカテゴライズされている人たちが自虐的に付けたものです。いわゆる日向にいる人たちは多数派だったため名付けられていなかった、陰キャという名前が広まったために、そうでない人＝陽キャと対をなすように名付けられたのだと考えます。性別での話でいくと、同性愛という概念が広まったために異性愛という名称がつくられたというのと同じです。しかし、同性愛、異性愛の中でも、性自認などにより呼称が細分化されていったように、陰キャ陽キャのどちらともとれない人の存在が出てきて「陰陽師」という分類が現れた。最初は陽キャをただ単に「陰キャ以外の人」を指す言葉として使っていたのが、陽という印象に引っ張られ、或いは僻み妬みから、クラスの中心（太陽）存在を陽キャと呼ぶようになったのでしょうか。このような言葉は劣等感が強い側、マイノリティー側の方が使う人が多いように感じます。同性愛の人が自分はマイノリティーなのだ意識して、自分を同性愛、マジョリティーを異性愛と呼ぶことが多いように、陰キャと呼ばれる人ほど、陰キャ、陽キャという言葉を使います。マジョリティーは生活をする中で自分の立場を意識する場面が少ないということの表れでもあると思いました。

今回の授業で述べられているマジョリティーとマイノリティーについて、極論であるが、私は倫理学の問題である、トロッコ問題に似ている節があるのではないかと考えた。社会生活において、多数を尊重するために少数を犠牲にするスイッチをおすような制度があるのではないかと考える。トロッコ問題においては、人々はジレンマを抱えるが、社会におけるマイノリティーに対してジレンマを抱えたことがあったらどうか。少なくとも私は胸を張ってあったといえる自信がありませんでした。この恥ずべき自身を改めて考え直す必要があるなと思わされました。

【あべのコメント：恥じる必要はないですが、マイノリティーは社会のなかで不可視化されているので、多数派の意思決定によって結果的に排除されている人たちがいるという現実、なかなか気づけないわけですね。意図して排除する場合がありますが。】

…LGBTに関しては、「パレードへようこそ」（原題「Pride」）が役に立ちました。この作品は、レズビアン・ゲイの活動家たちが、サッチャー政権下で起きた1984年から1985年の炭鉱ストライキの際に炭鉱労働者の家族に金銭支援を行い、炭鉱夫支援同性愛者の会の活動の発端となった実話を映像化したものです。炭鉱夫たちが最初は嫌悪感を出していたものの、同性愛者の人たちと触れ合うことで、自分たちと何ら変わらないと気づき始めるシーンは、とても感動します。この映画は、同性愛者の人たちの目線で描かれているので、同性愛者の人たちへの差別や冷遇、またイギリスのLGBTに関する歴史を学べ、また見ている側にも自分たちはどうすべきかを訴えかけてくるので、とてもおすすめです！

【あべのコメント：そうですね。炭鉱を舞台にした映画は、名作が多いです。紹介した『リトルダンサー』もそう。『スタンドアップ』や『プラス！』も。『フラガール』もある意味そう。しかし、『リトル・ダンサー』（Billy Elliot）は、2000年の映画なんですよ。20年まえにあれだけの内容をえがいたのはすごい。】

…「きのう何食べた？」というドラマがLGBTに関する話で、おすすめです。LGBTの男性二人が主人公ですが…

【あべのコメント：ゲイ男性しか登場しなかったように思いますが。なんでもLGBTといえればいいものではないです。】

…セクシャルマイノリティーという言葉にも疑問を感じる。多数派と少数派という言葉は差別を助長するのではないか。カテゴリーでその人を理解するのではなく、一人ひとりの性意識として向き合うことがあるべき姿だと私は考える。

【あべのコメント：多数派とか少数派というのは、社会の現実を観察したときに、見いだすことができる構図をさしています。非対称な関係が現にあるという現状認識から出発することが、どうしても必要であると考えます。「カテゴリーでその人を理解するのではなく」というのは、ほんとうにそのとおりです。その人そのものよりも、「ラベル」を見て判断してしまうことが、あまりにも多い。】

少数派の人への理解、尊重はいろんな場面でいろんな場所で言われることだけど、少数派を尊重して「あげよう」みたいな考え方は、多数派の中でしか生まれないし、多数派が「自分たちが普通、一般」だと無意識に思っているから生まれるものだなと感じました。…

…先生のおっしゃる「さまざまな人がいることをきちんと把握したうえで、社会をつくる」ということ、今回の資料を読んでいなければ私はこの意味を「マイノリティの人も暮らしやすい社会を作るべき」ととらえていたと思う。これは多数派が主体だと思っているからこそ出てくる傲慢な考えで、そもそも異性愛者が多数派で主体である前提であることがおかしいと気付かされた。そして同時に、なかなか社会が変わらない、変えるのは「社会のマイノリティの役目」になってしまっている原因が、今のこの異性愛者主体で作られた社会では、この社会を異性愛者が不便に思うことはおそらくほとんどないからであると知った。異性愛者に自分たちも社会を変えていくために行動していこうという考えを持たせるにはどうしたら良いだろうか。…

【あべのコメント：社会はみんなで作るものであり、だれかを排除して社会をつくるのはよくない。それだけのことではないでしょうか。】

…確かにマイノリティにあたる人々が意識せざるを得ないのは傾向上仕方のないことかもしれないが、反対に自分がマイノリティであるにもかかわらず、自身に当てはまる類がそこに見つからないという場合もあるかもしれない。そのような場合は自分と同じような人を見つけたりするためにも、単に少数派というだけでなく呼称があった方がいいのかもしれないと感じた。…

【あべのコメント：そのとおりです。名前があると、つながることができる。コミュニティ（居場所）ができる。】

…LGBTとかそういう言葉もなくすべきだと思います。そういう言葉がある時点でおかしいと思います。…

【あべのコメント：不可視化に抗すること、連帯することを目的に使用されてきた「自称」を「なくすべき」というのは穏当じゃないですね。「LGBT」だけじゃないだろ」という、よくある真っ当な主張ならともかく。マイノリティが連帯しコミュニティをつくるのは、当事者にとって日常の風景です。それが見えていないから、LGBTという用語がマジョリティによる客体化のように見えてしまうんでしょうね。たとえば「障害者」も、自称であり他称なんですよ。】

レズビアンの人達は、自分達のことを「レズビアン」もしくは「ビアン」と呼び、「レズ」と呼ぶのはタブーだと聞きました。響きはほぼ変わらないし、言わんとすることは同じであるはずなのにどう呼ぶかによって差別的なニュアンスを持ってしまうので気をつけなければいけないと思います。私は元からあまり使っていませんでしたが、外国人のことを「外人」と呼ぶのは差別語だと聞いてから、誰かが使っていると嫌な気持ちになります。…

【あべのコメント：そうですね。あえて「レズ」と自称する人もいますが、メディアや非当事者が「レズ」という略語をつかうべきではないと当事者は主張しています。これは尊重されるべき。「外人といわれるのはイヤだ」というのも、何十年もまえからある話。わたしが大学生のころも留学生がいました。】

私は「外人」という言葉があまり好きではありません。周りの人たちは何気なく、ただ外国人の意味で使っているのかもしれないのですが、私はそう呼ばれる度にとてもいやな気分になります。私は日本生まれ日本で育ちで生活は完全に日本スタイルなので、昔から、「自分は日本人だ」と思って生きてきました。しかし見た目は紛れもなく外国人なので、今まで頻繁に「外人」という言葉を耳にしてきました。私にはこの言葉が文字通り「外の人」と言われているように思え、私には見えない線で線引きされていて自分だけ外に追い出された気持ちになってしまいます。特に初対面の人にそう呼ばれた時は、会って間もないのに壁ができたように感じてしまい悲しくなります。私はネガティブに捉えています。相手は無意識で呼んでいる場合が多いし、私自身もやめてほしいとはなかなか言えないので聞き流すことが多いです。

私の祖父は優しくとても良い人ですが、たまに祖父の中にすごい偏見があって、それが垣間見える瞬間があります。たとえば、パラリンピックとか、障害者の方がスポーツで話題になるときがあります。その時祖父が「かわいそう」とか「見てられない」とよく言います。「障害者を見世物みたいにしていって見てもらえない」というんです。私にはその感情が理解できませんでした。どうして自分のやりたいことを見つけて輝いているのに、障害者であるからといって人の前で目立つことさえかわいそうと思われてしまうのかと思いました。そこには、「健常者（自分を含め）が普通であり、障害者は隠れているべきだ」という自分は多数派だという考え方があると思います。…

異性間の恋愛と聞いて、同性パートナーシップ制度が思い浮かんだ。同性同士のカップルを公的なパートナーと認めるこの制度は一見いいものだと考えられるが、今回の授業を聞いて少し疑問を持った。種類を異性愛、同性愛と分けていることがそもそもよくないことで、重要なのは異性を好きだろうが同性を好きだろうが全部まとめて愛であるとする考え方であるから、同性パートナーシップというようにわざわざ新しく制度の名前をつけて「結婚」とは別の物にわけると違和感があった。しかし、辞書や法律で結婚は「男女が夫婦になること」とはっきり性別が書かれていることを知り、同性間でパートナーとなることは結婚とは呼べないことを知った。この制度を批判したいわけではないが、大切なのは新しく制度を作るのではなく、もともとの「結婚」の意味を考え直し、今ある前提を壊していくことなのではないかと感じた。

高校時代の友人に、「かわいいよりかっこいいって言われたんだよね」と言って「ジェンダーレス女子」を目指す子がいました。その後仲良くなるにつれて自分は女の子のことが好きなのかもしれないと打ち明けてくれたり、世の中にはこういうジェンダーがあると教えてくれたりしました。去年の春東京に進学した彼女が「自分はレズだと分かった。やっとすっきりした」とわざわざ電話してくれました。今は大学のLGBTについて考えるサークルに入っているそうです。私は途中までどうしてそんなに性別（ジェンダーレス女子などのカテゴリ）にこだわるんだろう、自分が自分ならいいじゃないかと思っていたけれど、彼女の「すっきりした」という言葉や安心したような声をきいて、ちょっと知識をかじったくらいのマジョリティからすると差別的にすら思えるカテゴリーでも、当の本人たちはそういう言葉がなければ自分の場所が分からなくて不安に感じるのだと知って驚きました。…

今回のYouTubeのライブ配信で「多数派には名前がない」「少数派には名前が多い」というお話の中で、右利き左利きについて例が挙げられたとき、私はスノーボードやウェイクボードで右足前か、左足前かで呼び方が変わることにについて考えました。左足前は「レギュラー」右足前は「グーフィー」と呼びます。板の作りが変わるので、違いはあるべきだと思います。でも言葉の本来の意味を調べてみて、驚きました。「レギュラー」(regular)は「通例・通常のものであること。また、正式・正規のものであること。また、そのもの。」(デジタル大辞泉)となっています。「グーフィー」(goofy)は「ばかな、まぬけな、あほ面の、風変わりな」(ジーニアス英和大辞典)が1番上にある意味でした。スノーボーダーやウェイクボーダーの中では左足前の方が多数です。スキー場でも多く見かけます。言葉の意味を考えるとマジョリティだから「レギュラー」、「通常」となったのでしょうか。私は右足前でスノーボードもウェイクボードもやります。右足前だから「グーフィー」、「風変わりなまぬけ」となるのでしょうか。今まで、何気なく使っていたし、こんな意味がある言葉とは知りませんでした。でも振り返ってみると、「グーフィーなの？珍しいね」と何度も言われたことがあります。今まで考えたことなかったけど、言葉の意味を知ると複雑な気持ちになりました。トイレについてのお話を聞いてふと思いついたのは子供の頃のことです。たまに便座が二重になっているトイレがあります。ひとまわり小さな便座が取り付けられているものです。小さいとき、出先でトイレに入ると、大きすぎてはまってしまったり、便座が高すぎてうまく用を足せないこともありました。自分が大きくなって忘れていたけど、こういう視点から見ても、「みんなにとって安心安全なトイレ」を作るのは大事であるし、すべての人に使いやすいというのは難しいところもあると思いました。

【あべのコメント：スノーボードの話は初耳でした。大学で授業をしていると、こういう情報をもらえる。感謝。】

…グローブやテニスのグリップの巻いてある向きなど右利き用の物が多い。私は右利きのため、このような売っている物などはっきり分かる物しか気づかなかった。しかし、左利きの友達と話したとき、私が知らないことがほかにたくさんあって驚いた。…

…今では右でも左でも使えるはさみが普及してきて便利になったが、もっといろんな面で左手を使うことも配慮できると思う。それに加えて特に字を書くことと箸をもつことに関しては本来左利きでも右利きに直さなければならぬという風潮があるが、これは多様性を否定しており、必要のない風潮だと私は思う。なぜか自分だけ明らかに使いづらい手で生活することを強要され、それが理由でうまくできなくても事情を知らない人にはただ下手だったり下品に見えたりしてしまう。これが自己否定感を抱かせる原因になることだって十分ある。個人が個性を押し殺すことで社会で生きやすくするのはではなく、社会が個性を認め適応していくことで個人が生きやすいようになってほしい。…

【あべのコメント：一方で左利きの人に「器用でいいね」などという人もいるんですよ。器用になるしかなかったけどなの。そして、左利きの人みんなが器用になれるわけでもないのに。】

…ライブ配信で先生が、少数派だと呼び方が多いことがある、ということの例に左利きをサウスポーと呼ぶということをおっしゃっていて思い出したことがある。それは、スポーツをするときにサウスポーは有利になる、とされていることだ。これは右利きの人が左利きの人のプレーに慣れていないため対戦すると動きの予想がしにくいためだと思う。私自身も左利きであるため、中学時代にスポーツをしていたこともあり、何度も言われたことがある。しかし、私自身は運動が得意ではないこともあり、その効果を感じたことはありません。そのため言われるたびにプレッシャーのようなものを私は感じていた。私は差別をされていたとは思っていないが、左利きだから、ということで特別視のようなものをされている気がしてこのようなことを言われると複雑な気持ちになる。

私はお箸や鉛筆を左手で持ちます。この性質に関連する私の経験談を述べます。昨年、アルバイト先で私が書類に必要事項を記入している時、左手でボールペンを握る私を見た経理担当の方が「『ぎっちょ』なの！？あ、『ぎっちょ』って言っちゃいけないんだっけ？」と笑いながら差別語を浴びせてきました。正直に言いますと、ダメだと分かっていたなら言わないでほしかったです。目上の方なので笑って誤魔化しましたが、友達なら絶交するかもしれません。それくらい嫌な出来事でした。このような出来事は他にもありました。私が5歳の時、病院の待合室で絵を描いていると面識のないお婆さんがやって来て「右手で持ちなさい」と説教してきました。当時の私は何を怒られているのか全くわかりませんでした。また、9歳の時には、右手で筆を持つという約束で書道を習い始めました。左手で筆を持つなら受け入れないとのことでした。

お箸と鉛筆を左手で持つので左利きだと勘違いされますが、私は左利きではなく用途によって利き手を変える「分け利き」です。中学生の時にバレーボール部に所属していたのですが、サーブ、スパイクなどは右手でやってましたし、卓球のラケットも右手で持ちます。運動全般はほとんど右です。分け利きという言葉があまり知られていないのか、お箸と鉛筆だけで左利きと認識されてしまいます。説明するのも手間なので左利きと自称していますが、事実は異なります。世の中には右利きように設計されたものが多く、駅の改札やパソコンのマウス、市役所や郵便局でよく見かけるバネのついたボールペンなどが例として挙げられます。それらは左手では扱いにくく、仕方なく右手で使い続けているうちに慣れてきます。私の場合は改札とマウスは右手で扱います。左利き差別は昔のこととされていますが、現在もはっきり残っています。「ぎっちょ」は右利き優勢社会に適応しようと努めている人にかける言葉なのでしょう。マジョリティ側の考えが変わらない限り、この差別は無くなりません。今まで出会った失礼な方々には自身が多文化社会に適応できていないことを自覚し固定概念を経て、マジョリティの在り方を勉強していただきたいです。

…貧困な人とお金のある人の違いを受け入れて、みんな違ってみんないいと考えるのは違うなと思った。多様性は、自分が思っていたより色々なところに転がっていると思った。すべての多様性を受け入れるべきなのでなく、貧困はあってはならないちがいであるから、解決していく必要がある。

【「女性医師や女性官僚だったり男性看護師など」について】…日常生活において普段から目にしているものを見ても特に何も思わないが、普段から見ない意外性のあるものや久々に訪れた地で以前までとは大きく変わっていることがあるとどうしても驚いてしまったり、興味を持ってしまったりしてしまう。それと同じでこの職業はこういう人が就くべき、この性別が就くべきという一般的にはこうだという固定概念がついてしまっていることから、その固定概念に合わないものには関心や興味を持ったりする意味としても別称が使われるのではないのでしょうか。…

【あべのコメント：そうですね。ことばは現実を反映している、というだけのことです。女性総理などと、あえて意識することがなくなる、つまり当たり前前の風景になれば、そういう有徴表現はなくなっていきます。問題は固定観念。で、固定観念をかえていくために呼称をかえるというアプローチもある。呼称は現実に影響をあたえるものだからです。】

文化批評の授業で、「美人」という単語は女性に対して用いるのに対し、男性には「美男」という表現が用いられると学びました。これは、美しいことが基準になるのは女性であることが表れています。さらに、「才人」という言葉は男性に用いられるのに対し、女性には「才女」が使われると学びました。これは、才能が問題になるのは男性であるということの表れであるそうです。普段何気なく使っている言葉にも、「関係の非対称性」というものがあることに驚きました。…

YoutubeでLGBTの方の動画を見ていたら、コメント欄に「ノンケ」という言葉がありどういう意味だろうと思い調べてみると、異性愛者のことでした。多数派は自分たちの名前を知らないとはまさにこういうことなのだと思えました。…

自粛期間中に今まであまり見る機会がなかった海外ドラマを見る機会があった。まず初めて見たものは20年以上前のもので、白人がたくさん登場して恋愛事は基本的に男女間という非常にステレオタイプのものだった。次に見たドラマはここ数年で制作されたもので、メインキャラクターには白人も黒人もラテン系も登場し、恋愛面でも、同性婚をしているキャラクターや自分がバイであることに気づくキャラクターが登場し、バラエティー豊かだった。実際に演じていた俳優を調べてみると、バイであることを公表している人もいて、十数年で制作されるドラマの中にもマイノリティーだと私が思っていたものが当たり前のように登場するようになり、時代や社会の認識の変化を実感した。…

【あべのコメント：現代の作品だって、数十年後にはステレオタイプのなものとして感じられるでしょうね。そうであってほしいですが。】

…「女医」や「女性総理」のように女性が有徴であり男性は無徴であるものの逆を考えてみた。まず、一般的に女性が多い職業を挙げてみる。看護師や保育士などがある。だが、「男性看護師」や「男性保育士」という呼び名はあまり聞かない。そこで、「イクメン」という言葉を思い出した。育児をする男性のことである。なぜ育児をするときに男性にだけ名前がつくのか。父親なら当たり前のことをしているだけである。そこで、これら職業に特徴のある名前をつけるときには見下しではなく尊敬の思いが少し込められているのではないかと思う。女性なのに医者や総理になるなんてすごい、男性なのに育児をするなんて偉い、といった思いである。そこで男性の看護師や保育士が無徴のままなのは、そこに尊敬がないからだと考える。男性がそのような職に就くことは難しいことではないと人々はどこかで思っているのではないだろうか。

【あべのコメント：そうですね。わりと同感するのですが、「男性看護師」や「男性保育士」という用語はよく使用されていますよ。めずらしいだけで有徴化はされます。そこにどんな意味づけがあるかは、さまざまでしょうね。】

…「男性」ほぼ同じ人数がいるはずの「女性」が歴史上差別されてきたことを見れば人数が関係ないことも多いとわかる。…

【あべのコメント：ちなみに、性差別がきびしい社会では、「ほぼ同じ人数」ではなく、女性の人口はすくなくいです。そのような社会では「息子」をのぞむ家庭が多く、妊娠中に女の子だとわかると中絶してしまうからです。息子が生まれるまで子作りする場合があります。】

…スチュワーデスという言葉（男も含めた）客室乗務員という意味合いにしていまえばそれで終わりなだけですが、なぜわざわざ耳に不慣れなワードを作り出し従来の言葉は差別的だから新しいこの言葉を使おう！と躍起になるのだろうか。…

【あべのコメント：英語だから想像しづらいのかもしれませんが、「女医」という語を医者という意味あいにしてしまえばいいというレベルの話ですね。※「-ess」は女性を意味する。「躍起になる」などと感じるのは、なんなんですかね。】

YouTubeで「Appleのトイレは神！」という動画を見つけました。（チャンネル名：ゆういずみ）この方は元男性で、今は性転換手術をして戸籍の性別も女性に変更済みだそうです。動画内では、Apple丸の内のトイレを利用した際に感動したと話しています。お手洗いと書かれた表示の先には、3個の個室があって、男女の区別はなく、中はとても広いそうです。そのため、車いすの人も利用しやすいです。性の多様性にも配慮されています。調べてみると、トイレに限らず、多数のスタッフによる多言語への対応、補聴器の貸し出し、案内に点字の併記、盲導犬の入店可など、いろいろな配慮がされており、世界トップクラスの企業は多様性への配慮もすばらしいと思いました。

【あべのコメント：リンクしておきます。「Appleのトイレは神！全てのトイレが誰でも使えるトイレ☆.*°トランスジェンダーにも優しいです！」 <https://www.youtube.com/watch?v=FilA3mNAAtw>】

…先生がおっしゃった、トイレの便器のピクトグラムについて調べていると、TOTOによる2018年性的マイノリティのトイレ利用に関するアンケート調査結果が載っていました。32ページに、男女別のない人型、男女の人型、男・女・男女を組み合わせた人型、便器の形の4つのマークのうち、性別を問わず利用できるトイレのマークとしてトランスジェンダー、シスジェンダーともに便器の形のマークがふさわしいと答えたという結果になっていた。

<https://jp.toto.com/ud/summary/post08/report2018.pdf>

便座の形のマークなら、みんなが何も考えることなく使えるのだとわかりました。

解説動画にあった性別を問わないトイレの話で、スウェーデン国立美術館は地下が全て廊下とトイレでできているのを見たことがあります。これは男女が分けられているわけでもなく、完全に個室のトイレでメインの廊下から枝分かれした先にそれぞれトイレがあります。私は体の性と心の性が一致していないわけではないのですが、サービスエリアやテーマパークなど大勢の人がトイレに並ぶような空間では自分がトイレに入るのを他人に見られるのが嫌で入らないようにしています。日本でトイレに広く空間を使うことは土地面積などのことを考えると難しいことは承知です。しかしこの美術館のように枝分かれした先にトイレを作ることで、ただ男女兼用にするだけでなくトイレに入ることを隠すこともできるので、普段人目を気にしてトイレに入れないような人も入りやすくなるのではないかと考えました。

次に、今回のコメント紹介にも少しありましたが私は「オタク」という言葉に関係の非対称性を感じます。スポーツや俳優などについてはそれらが好きな人のことを「ファン」と呼びますが、それに対しアニメやアイドル、フィギュアなどが好きな人のことを「オタク」と呼ぶのはなぜなのでしょう。アイドルオタクとはよく言いますがスポーツオタクとはあまり言わない気がします。私は世間にはまだあまり知られていないあるアイドルグループが好きです。しかしオタクと思われるのが嫌で誰にもそのグループのことを話したことはありません。…

【あべのコメント：むかし『七人のおたく』という映画がありました。「オタク」という語の当時のニュアンスが見いだせるでしょう。ちなみに、オタクという語をつくったのは、中森明夫（なかもり・あきお）さんという人です。

参考：「「生まれる時代は選べない」“おたく”生みの親・中森明夫、半生を語る。」 <https://www.buzzfeed.com/jp/keiyoshikawa/akio-nakamori-era>】

私は、漫画やアニメが大好きな、いわゆる「オタク」です。私自身はこの趣味を恥ずかしいとは思いません。しかし、中学生の時、私が漫画やアニメが好きという話になったとき、友達に「大丈夫、私そういうの、理解あるから。」と言われ、モヤッとしました。その人にとってオタクは、「ふつう」は理解しがたいものであり、理解して「あげる」ものだと思っているのではないかと感じたからです。特定の趣味嗜好を持つ人々を、無意識に下に見て、そしてそれを自分は受け入れてあげる側だと思って優越感を覚えている人は、多いと思います。自分も無意識にそうしているかもしれません。趣味に限らず、例えば自分が社会の中でマイノリティと呼ばれる集団に属することを誰かに打ち明けた時、上記のように言われたら、良くない思いをする人はいると思います。これは個人的な意見ではありますが、比較的少数派に属する人々が、大変そうですね、受け入れてあげますよ、理解してあげますよ、といわれる社会より、特別でも異質でもなく、ありふれた多数派と何も変わらないものとして認識され、ただ存在する社会になれば、マジョリティとマイノリティという垣根も薄れ、心が軽くなる人が増えるのだろうかと思いました。

…私だっらずっと好きなアイドルがいて、出ているCDとDVDすべて持っているくらいの熱烈なファンなのに、好きな相手が二次元という人たちには「ファン」ではなく「ヲタク」と呼んで距離を置いてきた。三次元の相手を好きになったり応援したりすることが自分の中で普通のことという認識ができていたが、それは二次元が好きというマイノリティを差別していたんだと思った。…

【あべのコメント：自分に都合よく線引きしますからね。】

異性愛、同性愛について考えた時、『腐女子、うっかりゲイに告る。』というドラマを思い出しました。はじめは興味半分で見始めたのですが、同性愛者である主人公の葛藤や、生きづらさ、息苦しさがとてもリアルに描かれていて、毎回本当に心が苦しくなりました。これで同性愛者の気持ちを完全に理解できたと言うことはできませんが、これを見ることによって、知るきっかけにはなると思います。タイトルを聞いて敬遠する人も当然いるでしょうが、同性愛について全く知らない、知ろうともしない人にこそ、このドラマは見てほしいです。ドラマ中に「真に恐れるべきは、人間を簡単にする肩書き」「人間は、自分が理解できるように世界を簡単にしてわかったことにするもの」というセリフがあります。私はそのセリフにすごく納得し、その通りだと思いました。…

…私には幼稚園から高校まで同じで親同士も仲が良く、今でもしょっちゅう連絡をとって、遊びに行くくらい仲がいい異性の幼馴染がいるのだが、よく友達から「本当に付き合っていないの」だとか「本当は好きでしょ」といわれる。男女の組み合わせ＝恋愛で、同性同士の組み合わせ＝友情という考え方が今の一般論であり、「男女の友情は成立しない」という言葉は、人間を男と女で区別することが当たり前だからこそ生まれた考えだと改めて今回の講義を通して思った。

私は体が女性で、性自認は男女どちらでもあり感じたり女性的な男性だと感じたりしています（日によります。たまに身も心も女性になるときもあります）。今回のトイレの話について、思うことがたくさんあったので、箇条書きにしたいと思います。

・TED見ました。よく言ってくれたと思いました。自分のような人のことに言及してくれる人は少ないので、たまにいると嬉しくなります。

・コンビニのトイレに入るときだけ、何も考えていない自分に気づきました。トイレに入るとき性別のことを考えがちなのですが、それは完全に無意識だったので、PDF資料の「少数派は少数派であることを意識させられている」というのは本当だなと思いました（資料には民族についての話として載っていましたが……）。

・コンビニのトイレでありがたいのは、車椅子マークがついていないことです。ついでにトイレを使うこともあります。身体的には異常がないのに広々としたトイレを使ったら邪魔にならないかという罪悪感があって、性別を気にしながらも女性用トイレに入ることが多いからです。

・本筋からは逸れますが、「身体的には異常がない」というのも、マジョリティの傲慢さかもしれないなと思いました。「身体的に多数派であり、多数派用の設備で問題ない」ですね。

・男性用トイレに入ったらどうなるんだろうと思いました。服や髪型はほぼ男性ですが、小柄だし体のシルエットのこともあるので、女性が入ってきたと騒ぎになると思いますが……

・こっちからカミングアウトしないかぎり、女性扱いされるのはもどかしいですが、ある程度は仕方ないと思っています。私の性別を知らない人にとって、私が「女性であることに違和感を覚えている人」である確率より、「男性的な格好の女性」である確率のほうが高いので……LGBTsに理解のある人だとしても、「性別は？」とは聞きづらいし、とりあえず女性扱いするしかないだろうなと思います。

性について。私はスカートよりパンツ派だし髪もベリーショートが好き。男性より短いことも全然あって、でもトランスジェンダーなのかと聞かれたことはない。女性の場合はボーイッシュなファッションとしてむしろオシャレになる。なのに男性がスカートを穿いたりレースの付いた洋服を着ると「変」に見られるのはなんでなんだろうとずっと思っていた。制服も全員ズボンにするなどの動きがあるようだ。だったら男子がスカートを穿いたっていいと思う。先日近所の小学生と遊んでいて体操服が変わっていることに気付いた。私の時は男子は青色、女子は赤色のジャージだった。トイレのピクトグラムにしても、男女の色のイメージってこういうところで無意識に刷り込まれていたのかなと思う。

高校の英語でポリティカル・コレクトネスを勉強した。フランス語では男性形と女性形がはっきり分かれている。英語のように形を変えていくのは難しいのだろうか。知り合いがトランス女性だとして、その人のことを「彼」と呼ぶのと「彼女」と呼ぶのとどちらが正しいのか。その人の心に合わせたら彼女だけど他者には伝わらないと思う。…私は「みんな」が多数派の名前だと思っていた。「みんな」には少数派も含まれるはずで、確かにそれは名前ではないと気付いた。

【あべのコメント：三人称については、英語だと「she/her」「they/them」のようにソーシャルメディアのプロフィール欄に自分で書きこむ文化が定着してきました。自分の性自認を表示するということです。日本語だと、彼女や彼という、性別をふくむ語を使用しなくても呼称できるので、文化的な文脈がちがいますね。「あの人」「その人」でいい。】

…高校の英語の先生の話思い出した。先生は代名詞とその意味を答えて、と私たちに言った。高校3年生に向かってだったので皆いぶかしがりながら答えていく。一通り答えた後で先生はこれでは十分でないという。誰も先生が何を言いたいのか分からなかった。「theyは単数を表すこともあるんだよ。」先生の一言に皆驚いた。he,sheでは表したくない人、表せない人が使うのだと聞いた。時代とともに認められはじめた使い方だという。その先生はこの授業で取り上げられるような問題について多くのことを知っていて教えてくださった。…

私はよくボーイズラブ漫画、俗にいうBL漫画をよく読む。男性同士だからこそ生まれる感情の繊細や、同性愛では見られないシチュエーション、結婚して子どもを産むというゴールのない切なさなど、異性愛漫画とは違った面白さがあるからだ。しかし私は周囲にはBL漫画が好きなのは一切言わない。なぜならBLが好きといった途端、私は「腐女子」と言われてしまうからだ。「腐女子」を文字ったものらしいが、これを命名し使う人たちこそ、自分がふつうで正常であると信じて疑わないのだろうと思った。こういった差別は何も言葉（呼び名）だけにとどまらない。BL漫画の置き場からも、同性愛への差別が表れている。レディース漫画の近くに置いている本屋もあるが、18禁のコーナーにおいている本屋や、もっとひどいと奥まった場所にひっそりと別でコーナーを作っている本屋もある。全面的に出されているものはほとんどない。過激な漫画が奥に置かれるのは分かるが、なぜ純粋な青春を描いたBL漫画も隠すように置かれなければならないのか。本屋におけるこの漫画の配置は、現代社会の縮図だと感じた。

【あべのコメント：「腐女子」は自称からはじまったように記憶していますが、おっしゃることはよくわかります。】

私は学校のトイレもやはり男女わかれているところが多く、全ての児童が使いやすい心地よいトイレではないと思います。そんな中、愛知県豊川市一宮西部中学校では「児童用のトイレを改修し、男女用、女子用と別に「みんなのトイレ」を設けました。廊下から前室を経て各トイレに入る設計で、廊下からは児童がどのトイレに入ったか見えない」（日本経済新聞「LGBTに優しい学校に トイレ改修、制服見直し…」 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO28346760Q8A320C1KNTP00/> 2020年5月30日最終閲覧）というように性的マイノリティに配慮した学校作りも広がっていることも知りました。この中学校のように、男用女用だけでなく、もう一つの間、制服なら選択肢を用意しておくということはどの人も心地よく生きていくうえでとても必要であると考えます。また、私がジェンダーの話題が出てきたときにいつも思い出すことがあります。それは私の通っていた高校の子がSNSで、自分はトランスジェンダーであり、明日から男子の制服を着ていきますといった内容が投稿されていたことです。私の高校には制服は男用、女用しかなく、トイレも更衣も男女別、その上保健の授業も男女別というまったく性的マイノリティを受け入れた態勢でなかったと思います。私はその子と直接関わったことがあるわけではなく、見かけることがあるだけでしたが、その子は当時2年生だったので、高校では少なからず1年間は違和感を感じ、自分と葛藤しながら毎日生活していたのではないかと思います。毎日着る制服なのに選択肢がないため、先生に相談しないと自分の着たい制服を着ることができない、勇気を出してみんなに公表しないと受け入れてもらえないという社会は苦しいと思います。やはり社会にはいろいろな人がいるということを胸に刻み、社会を見直すことが大事だと思いました。

…愛知県立大学では多目的トイレというのを見たことがない。（私が見たことがないだけかもしれないですが）…

【あべのコメント：あります。数年まえからレイボーマークがついています。】

…私は人と意見が違ったら恥ずかしい、共感してくれなかったら怖いと思ってしまいで、自分の意見を言うことが苦手です。しかし、これに関してもみんなが同じ意見を持つわけないのだから、恥じていることが馬鹿馬鹿しいと思えました。この世界にはカテゴライズできないほど様々な人が存在していて、“普通”などないのだから…

…私は男女共用トイレを極力使いたくないと思っています。私がバイトをしている飲食店は男女別のトイレがあり、従業員がどちらも掃除するのですが、男性用のトイレは女性用のトイレと比べて汚れていることが非常に多いです。コンビニなどの男女共用トイレで男性が出てきたら、入るのを躊躇うこともあります。もし男女共用トイレが主流になった場合、どんな人でも利用しやすいトイレを目指したはずなのに、少なくとも私や私と同じように感じる人にとっては利用しづらいトイレになってしまうと思いました。

…海外の施設では水着を着たまま温泉に入っても何も問題はないのに、日本では何故か水着を着て入浴しようとする酷く咎められます。そもそもお湯を汚さないためだと主張するなら、水着を着たまま利用する市民プールの水は、汚してもいいということになってしまいます。私自身、自分の身体にコンプレックスを持っているので、もっと沢山の温泉施設で、例えば、狭くてもいいので貸切の温泉があったりすると、非常に嬉しく感じますし、それ以上により広い範囲の人々に心地良さを提供できるのではないかと考えました。

…更衣室の話がありましたが、性的な問題を抱えていなくても、例えば私は結構太っているので、高校や中学の時に集団で着替えるのがとても嫌でした、そのためトイレで着替えていた事もあります。私みたいな太っていない人でも、体に傷がある人や恥ずかしがり屋な人もいるわけで、全ての人に自分のプライベートを守れる社会づくりは大切だと思いました。…

…私は、男女共用トイレをもっと増やすべきではないかと思った。男女共用トイレにすることで、性同一性障害の方のためだけではなく、例えば、他の障害のある方とその付き添いの方が別の性別だった場合にも利用しやすくなる。また、男性の方も個室空間を利用することができるようになる。…

私が高校生の頃、ずっと疑問に思っていたことがあります。それは、「なぜ、女子トイレの入り口にはドアがあるのに、男子トイレにはドアが付いていないのか？」ということです。…

小学生だった時に、男子トイレのつくりがあまりよくなかったなあと思い出しました。昔の男子トイレは一直線に便器が並んでいて、ガラス張りの板が一枚だけ立ってありました。つまり、外から見れば用を足している横や後ろ姿がみれたということです。これは差別ではないかもしれませんが、あまりにもつくりがひどかったと思います。…

…全て同じ個室のトイレはトランスジェンダーの人にとって今より利用しやすいトイレだと思うけど、私はそういうトイレに少し抵抗してしまいます。でもその抵抗をトランスジェンダーの人は感じていたのだと気づきました。もしそういうトイレが当たり前だったら、抵抗はなかったかもしれません。初めの一步は重く、勇気のいることですが、慣れることで新しい当たり前になるかもしれません。

…ネット上のアンケートや、フォームなどでは、性別を選択する欄で、「どちらでもない」、あるいは「答えたくない」、という項目があるのをたまに見かけます。これも素晴らしい配慮だと思いました。まだ、公的な書類では男か女かしか選べませんが、可能な場合は、それ以外の選択肢を作ってもらえると良いと思います。

…私は片思いしている人がいた時に時々インターネットで無料占いサイトを利用していました。相手との相性や片思いが成就するかどうかなど軽い気持ちで見て楽しむ程度で利用していました。そのサイトにある占いはいくつもの種類があるのですが、大抵は自分の性別を男か女かで入力しなければなりません。そして相手の性別は自分の性別と異なる性別が自動で入力されてしまうというシステムでした。私は毎回ここに違和感を覚えていました。…

わたしはタイに何度か旅行に行ったことがある。そこで、ニューハーフショーというのを見た。ニューハーフショーはタイのツアー旅行のプランとして人気のあるものでもある。タイはLGBT先進国として有名だが、このようにニューハーフショーが人気になるのも世の中では少数派として分類されるLGBTの人々が歌ったり踊ったり生き生きとパフォーマンスをしてきからである、それがシスジェンダーの人々だったらここまで人気にはならないだろう。…

【あべのコメント：マイノリティにはよくあることですが、職業選択の自由が制限されている場合がありますね。「一般の職業」に採用されにくいので、以前は自営業やショービジネス、水商売などしか仕事がなかった。】

…イクメンとは、育児をする父親のことを指す。この言葉には前提として「女性が育児をするもの」という意味が含まれている。我が子を育てることが当たり前ではなく、名称をつけてまで褒められる今の社会はおかしいのではないか。また、家事や育児に「協力的」な父親という言葉もよく耳にするが、むしろ協力的であることを当然とすべきであるので「協力的」という言葉も育児においてふさわしいとは思わないが、今の社会において名称をつけるとするならば、家事や育児をしない父親の方につけるのが正しいのではないだろうか。

…サイニーで「イクメン」と調べてみました。そして、片桐真弓さん著の『イクメンの現状と課題：母親の語りの分析を通して』(2016)という論文を読みました。そこには「日本社会の現実を目を向けると、イクメンは珍しいから取り上げられるのであり、極めて例外的な存在にとどまっているといえる。」と書かれていました。これはまさに関係の非対称性であると言えます。母親が子供を世話するのが”当たり前・普通”であるがゆえに、イクメンなんて言葉は存在せず、父親が子供を世話するのは”珍しい”がためにイクメンという言葉が存在する。ただ、これもまた「男性は仕事、女性は家庭」という考えからなのか、男性の育児休暇が取りづらく、理解度が低いという現状があるのも事実であり、仕事と子育ての両立に理解のある職場の上司「イクボス」という言葉も存在するようで、これについても名前がついている限り”珍しい”と言えますし、「イクメン」という言葉が薄れていく(当たり前になる)未来はまだまだ遠いのかなと思いました

「差別」と聞いて、今月25日に起こった白人警察が黒人男性拘束時に首を圧迫したために黒人男性が死亡してしまった事件を真っ先に思い浮かべた。これを見た日本人の多くは「ひどい」と思うだろう。しかし、日本でも似たようなことが起こっていた。日本の警察がエチオピア人の男性を、高圧的な態度で拘束していた。エチオピア人男性は必死に「何もしていない！」と叫んだがまったく耳を貸そうとしない。「助けてください！」と周りに助けを求める。さらにひどいのは、周りの日本人の態度だった。「うけるー」などと言いながら笑う人間がいた。すごく驚いたが、この出来事には日本人の多くの人間性が表れていると思う。やはり外国人というマイノリティを見下す人は多いように思う。客観視しているときには「ひどい」「あってはならない」などと思えることでも、自分の身近な場所で同じようなことが起こっており、客観視することができない場合には、知らないうちに差別してしまうことも多いのかもしれないと思った。

【あべのコメント：クルド人に対する過剰な制圧については『毎日新聞』に記事がでました。「警官に押さえ込まれけが」 渋谷署前で200人が抗議デモ クルド人訴えに共鳴 <https://mainichi.jp/articles/20200530/k00/00m/040/179000c>】

…私は以前見た『陸海空 地球征服するなんて』というテレビ番組を思い出しました。この番組では世界初潜入の部族を含むいくつかの集落に潜入取材を行っていました。そのなかで、本来の生活ではスマートフォン等の機器を使用して、自動車を使って移動するなどしているものの、ビジネスとして民族衣装をまとって観光客の前に姿を見せる部族がありました。…

【あべのコメント：観光産業と伝統文化の演出というのは、世界的によくあることですね。京都にしたって、そういう部分はあるわけで。人類学の研究テーマの一つです。文化の商品化ということでもある。】

…カテゴリー分けの一つとして血液型での分け方がある。初対面の時の話題作りとして血液型を聞かれることが多いが、「B型です」と答えると一部の人からいやな顔をされる。理由を聞いてみると「B型って自己中なんでしょ」「私はB型の人とは気が合わないから」というような言葉が返ってきて、そんなとき私は悲しい気持ちになる。「B型の人」というくりではなく私自身を見てほしいと感じる。

日本人は血液型占いを信じる傾向にある、という話をテレビや本で見聞きしたことがある（「日本人」という言葉がどこまでを指しているかは分からないが）。血液型がうまく分散されているのは日本ぐらいであって、O型ばかりの国やB型ばかりの国がたくさんあるらしい。だからといってその国の人たちはみんな同じ性格であるはずがないし、世界中の人の性格が4つに分類できるはずがない。血液型占いを完全に否定するつもりはないが、ちょっとした遊びとして扱ってほしい。…

私は小学生の時に大阪から岐阜に、親の仕事の都合で引っ越しました。もちろん学校も転校して、岐阜の小学校に転入しました。転入した当初、クラスの子は私のことを「関西人」と何気ない会話の中で言っていました。当時とはくに意識していなかったけれど、今考えてみれば私が関西人ならあなたたちは何人なんだとなります。なかには「なんでやねん！って言って」と言ってくる子もいました。「関西人＝なんでやねんと言う」というイメージからなのかもしれませんが、会話の内容にツッコミどころがあるならまだしも、急に言えと言われても恥ずかしくて私は言えませんでした。…

【あべのコメント：「帰国子女（ハーフ）なの？ 英語しゃべってみてよ」と同じで、やめるべき文化ですね。いきなり舞台にあげられて観客席から消費されるような感覚、おもちゃにされる感覚だろうと思います。】

…先生がライブ配信中に両手の人差し指と中指を立てて二回ほど曲げる動きが気になったので調べてみたところ、強調の「」を意味していることがわかりました。これを知って見るとそのジェスチャーのときの言葉は皮肉っぽい言い方をされていて本当に伝えたいことを読み取ることができました。…

【あべのコメント：欧米のジェスチャーで「いわゆる」を意味します。引用符の ” ” を指で表示している。】

…私は周りの目をものすごく意識して行動します。みんなにどう思われるかをすぐに気にしています。例えば、私はアメリカに住んでいた経験があるため少し英語の発音が優れていました。しかし、私はわざと発音を周りの子に合わせていました。みんなと違うことを気にしてみんなと一緒によかったからですが、私の周りの人たちは「たまたま」私の周りにいる人たちであり、みんなではなかったのだと気づきました。自分の周りではみんなではないと思ったら、これから自分のやりたいことを少しずつ、堂々と、できるようになると感じました。

…アイヌ人琉球人などという言葉はあってもヤマト人とはあまりいわないという指摘…そもそもこの国はおおまかに琉球、日本、アイヌという3つの異なる国・文化からなる連合国のはずです。なのになぜか日本という多数派の国の名前だけが利用されています。このような成り立ちの国は他にもあります。例としてイギリスをあげましょう。僕はあまり“イギリス”という言い方が好きではありません。なぜならイギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドという4つの国の連合であってEnglish=イングランド人を語源とするイギリスという言い方は正しくないと考えているからです。実際に北アイルランドから来た人のことをEnglishとよぶとかなり不快な思いをさせることになるそうです。現地の人はイギリス全体のことを総称してイングランドと呼ぶことはなくUKとよぶことが多いようです。これは彼らが互いの文化を尊重し合っているからこのような呼び方になっているのです。ではこの国はなぜ日本と呼ばれているのでしょうか？なぜ日本人と呼ぶのでしょうか？琉球や蝦夷が連合する前もした後も“日本”という呼ばれ方がされていることでこの国が連合国であることは意識されにくくなっています。イギリスにはグレートブリテン及び北アイルランド連合王国(UK)という正式名称があります。日本及び蝦夷・琉球連合国のような正式名称がこの国にも必要なのではないでしょうか。…

【あべのコメント：すばらしい洞察ですね。ただ「蝦夷」はヤマト（和人）からみた呼称なので、アイヌモシリという自称が適切かもしれませんね。】

…伝統的に犬を食していた地域で、他の文化圏と同じように豚や牛を食すようになって食文化が変化した場合、これはどう評価すれば良いのでしょうか。犬を食すことに抗議する社会風潮によって食文化の変化を迫られたのではなく、その文化を持つ人々が自らの選択（例えば、栄養価・コストといった要因）で食文化に変化をもたらすことは、文化の形骸化を避けることとなります。すなわち、同化を阻止すべくある文化を保護・規定することは、多文化を尊重すべきと言われる時代だからこそ行われるべきではないと考えました。文化を個性とするならば、個性を認めることと、個性を理由に文化の共有を許さないことは違うわけで、「君たちの文化では犬を食べるんだから、その食文化は途絶えさせてはいけない（から、豚や牛は食べるな）」と外部が言うのは違うな、ということです。

【あべのコメント：そうですね。情報社会、移動が自由な社会では、文化は非常に変化しやすくなっています。文化の変化を部外者がくいじめようとするのも変な話です。食料援助の結果として食文化が変化することだってあります。日本もそれを経験しました（敗戦後にアメリカから食料援助（小麦粉と脱脂粉乳）をうけ、牛乳やパン食が定着した）。「ララ物資」といわれ、じつは海外日系人が日本におくったものでした。『海外移住資料館だより』2014年夏号「ララってなあに？ 日本を助けたおくりもの—ララ物資にみる海外日系人との絆」 <https://www.jica.go.jp/jomm/newsletter/pdf/DayoriVol35.pdf> ともかく、日本は敗戦後、生活文化をおおきく変化させました。】

人間は自分にとって都合の良いものしか情報を見ないからそれが世間の普通だと誤認して意見が違うものを真っ向から全否定してしまうものだと思います。自分を相対的に見ることは重要だと思いますが、そのためには他にどんな意見があるのかを理由とともにいろいろ媒体、情報をしっかりと確認しなければ正しく判断をすることはできないと思います。例えば、今誹謗中傷が話題になっていて、それに関して多くの著名人がコメントしていますが、その中の多くの人が誹謗中傷という定義に当てはまるコメントをしていたことがある人ばかりです。そのように多くの人は何がいけないことなのかかわかっていても、たくさんの似たような考えの人たちに称賛されたり、共感されたりして自分のやっていることが正しく認識できず誹謗中傷、いじめといったことを行ってしまうのだと思います。

対立、暴力、紛争などについて考えるヒント

■音楽

Jean-Jacques Goldman (Fredericks, Goldman, Jones) 「Né en 17 à Leidenstadt」

Cara Dillon 「There were Roses」

中島みゆき 「4.2.3.」

■映画

『ホテル ルワンダ』メディアをつかった憎悪扇動がもたらしたもの。

『レッドダスト』南アフリカにおける「真実和解委員会」のとりくみについて。

『フルメタル ジャケット』

『アクト・オブ・キリング』 『ルック・オブ・サイレンス』

『麦の穂をゆらす風』

『クラッシュ』

『ディス・イズ・イングランド』

『青い鳥』いじめとは何であり、どのような問題なのか。どのように向きあうのか。原作は重松清。